

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第20回 全国大会プログラム

日時：2020年11月28日（土） 10:00～17:50
Zoom 開催（詳細は後日 ML にて案内）

★Zoom 入室開始 9時45分

★研究発表（10:00～12:25）

	第一室	第二室
10:00 10:45	<p style="text-align: center;">司会：高知大学 関良子</p> <p>1. ウィリアム・モリスの工芸論における宗教性について——ジョン・ラスキンからの影響を中心に 東北大学（院） 島貫悟</p>	<p style="text-align: center;">司会：早稲田大学 木村晶子</p> <p>1. 「障害者」像に潜むジェンダー <i>The Moonstone</i> における障害の克服と限界 学習院大学（院） 後藤千宏</p>
10:50 11:35	<p style="text-align: center;">司会：順天堂大学 庄子ひとみ</p> <p>2. オフィーリアとセクシュアリティ —女性作家メアリ・カウデン・クラークのオフィーリア像をもとに— 新潟大学（研究員） 風間彩香</p>	<p>2. 悪夢の語り：ロバート・ルイス・スティーヴンソンの印象主義的技法 駒澤大学（兼） 守重真雄</p>
11:40 12:25	<p>3. 後期ヴィクトリア朝文芸誌上に迫る著作権意識とプロフェッショナルリズムの高まり 大阪成蹊短期大学 麻島徳子</p>	<p>3. 葬儀から読む『オリヴァー・ツイスト』 青山学院大学 込山宏太</p>

★シンポジウム（13:30～16:00）

第一室

1. 芸術のための芸術／世界のための芸術——開かれた唯美主義の形態

司会・報告：日本女子大学 川端康雄
報告：慶應義塾大学 横山千晶
報告：フェリス女学院大学 近藤存志
報告：慶應義塾大学・東京外国語大学（兼） 加藤千晶

第二室

2. ヴィクトリア朝の書簡——国政から私信まで

司会・報告：駒澤大学 川崎明子
報告：関東学院大学 君塚直隆
報告：明治大学 小宮彩加

★特別講演（16:15～17:30）

司会：甲南大学 中島俊郎

帝都に響き渡る咆哮——近代ヨーロッパの動物園・水族館文化

関西大学 溝井裕一

★総会（17:35～17:50）

司会：同志社大学 玉井史絵

★懇親会（18:00～19:00）リモート開催

【研究発表】

(第一室)

1. ウィリアム・モリスの工芸論における宗教性について——ジョン・ラスキンからの影響を中心に

東北大学(院) 島 貫 悟

1934年にウィリアム・モリスと柳宗悦の工芸論を比較した壽岳文章は、柳の工芸論には宗教的な深さがあるのに対し、モリスの工芸論には宗教性がないという理解を示したが、この理解の妥当性は未だ十分に検証されていない。本発表ではまず、モリスの工芸論に多大な影響を与えたジョン・ラスキンの「ゴシックの本性」においては、工芸論と宗教思想が密接に結びついていることを、ラスキンがゴシック芸術の特徴として指摘した「荒々しさ」と「自然主義」という概念を中心に検討する。その上で、モリスの工芸論の中心的命題である「芸術とは人が労働のなかで感じる喜びの表現である」という言葉が、ラスキンの宗教的主張を踏まえたものであることを確認し、さらに、モリスのデザイン論には、ラスキンのキリスト教理解と結びついた「自然主義」が受け継がれていることを示す。以上の考察から、モリスの工芸論には言外の宗教的奥行きが存在することを明らかにする。

2. オフィーリアとセクシュアリティ

—女性作家メアリ・カウデン・クラークのオフィーリア像をもとに—

新潟大学(研究員) 風 間 彩 香

原作でのオフィーリアは清純さとエロスを併せもつ存在である。近年の翻案映画や二次創作ではオフィーリアのセクシュアリティが表現されるが、18世紀以降は専ら純潔無垢な存在とされた。性に抑圧的であったヴィクトリア朝において、オフィーリアを性との関連でとらえたのが、メアリ・カウデン・クラーク(Mary Cowden Clarke, 1809-98)の前期譚小説『シェイクスピアのヒロインたちの少女時代』(*The Girlhood of Shakespeare's Heroines*, 1851-2)であった。クラークが造形したセクシュアリティをもつオフィーリア像は、家父長的女性像と格闘し新たな女性像を切り開いた女性作家の試みに連なる。一方で、性との関わりこそが原作での悲劇的運命の要因と解釈され、オフィーリアは異性に性的感情を抱いたために身を滅ぼした反面教師として、女性読者の教訓素材となった。クラークのオフィーリア像を、ヴィクトリア朝の女性観や小説に求められた社会的役割、性に関する言説の中でとらえたい。

3. 後期ヴィクトリア朝文芸誌上に辿る著作権意識とプロフェッショナリズムの高まり

大阪成蹊短期大学 麻 島 徳 子

従来、文芸作品の知的所有権をめぐる議論において、批評家が注目する時期は18世紀と20世紀後半に偏っていた。その理由のひとつには、18世紀は近代的な著作権法の基礎が固められた時期であったからであり、もうひとつには、20世紀後半が技術革新による情報化社会における著作権のあり方を再考する時期であったからである。それに対して、19世紀から20世紀初頭に注目する議論は「乏しい」と指摘されている(Saint-Amour 14)。本発表では、18世紀から19世紀に引き継がれた、本来論理的矛盾を孕んでいるロマン主義的独創性の概念が著作権をめぐる議論の基盤となり、その権利を侵害することについての批判が倫理的様相を強めていった議論の変遷過程を、後期ヴィクトリア朝の文芸雑誌およびそれに類する書誌に辿る。そのうえで、その議論と呼応するように、文筆業を専門職として社会的認識を高めようとするプロフェッショナリズムをめぐる議論もまた、19世紀末にかけて活発化していったことについて、両者の論理的な関連性を考察する。

(第二室)

1. 「障害者」像に潜むジェンダー：The Moonstone における障害の克服と限界

学習院大学(院) 後 藤 千 宏

Wilkie Collins の *The Moonstone* (1868) は、昨今障害学研究のアプローチから再考されている。センセーション小説は障害を肯定的に捉え、‘normal’に戻される存在として障害者を描く他のヴィクトリア朝小説とは異なる障害者像を提示する。本作品でも、身体に障害のある Rosanna Spearman と Ezra Jennings の手紙や日記が公開されることで健常者目線の支配的なナラティブに挑戦している。Collins は他の能力で障害を補える可能性に関心があり、健常者と障害者の二項対立を曖昧にしていることはよく指摘されるが、障害を持つ人物たちの性別や階級の差異は見過ごされ「障害者」という1つのカテゴリーに分類し

分析されてきた。本発表は、女性で労働者階級の Rosanna、Lucy Yolland と、男性で医者として‘normal’な人物たちのナラティブに貢献する Ezra に注目する。ジェンダー批評を取り入れた障害学の理論を応用しながら、本作品が「障害者」の負のレッテルを克服できる可能性を示す一方、それは男性的な特権であり、ジェンダーによる限界がある事実も示唆していることを明らかにする。

2. 悪夢の語り： ロバート・ルイス・スティーヴンソンの印象主義的技法

駒澤大学（兼） 守重 真雄

英国小説の中で印象主義的技法が明確な形で現れ始めたのは、一般的に 20 世紀初頭だと考えられている。もともとフランス絵画の世界で興ったこの芸術思潮は、英国作家にも影響を与え、小説がヴィクトリア朝文学を特徴づけるリアリズムからの脱却を図る上で大きな役割を果たした。

現在、英文学における印象主義研究で 20 世紀以降の小説を論じたものは多いものの、19 世紀の作品についてはいまだ十分とは言い難い。19 世紀後半に活躍した作家ロバート・ルイス・スティーヴンソンは、印象主義の先駆的作家であるヘンリー・ジェイムズと親交があったことで知られ、絵画から着想を得て新たな表現技法を模索した作家の 1 人である。そこで本発表では、スティーヴンソンの文体論および絵画との繋がりを確認した上で、『ジキル博士とハイド氏の奇妙な事件』（1886）に見られる印象主義的技法を明らかにする。

3. 葬儀から読む『オリヴァー・ツイスト』

青山学院大学 込山 宏太

チャールズ・ディケンズは生涯を通じて葬儀への関心を持ち続けた作家であった。死が資本主義に取り込まれていくヴィクトリア朝にあって、彼は 1852 年に自身の編集する雑誌に発表した「死の取引」と題するエッセイでウェリントン公爵の国葬を「見世物」として痛烈に批判し、遺言書において自分の葬儀では過度な礼服を禁ずると激しい調子で書きつけた。当然小説のなかでも葬儀あるいは葬儀屋はたびたび描かれているが、作品解釈においてこうした箇所を重視する研究は決して多くない。

『オリヴァー・ツイスト』（1837-39）を取り上げる本発表では、フェイギンとオリヴァーの最後の邂逅場面一翌日に控えるフェイギンの処刑を語り手は葬儀になぞらえる一の分析を中心に、冒頭のオリヴァーの母親の死および結末におけるその受容、物語前半部分でのオリヴァーの葬儀屋での徒弟奉公のエピソードなどを併せて考察し、葬儀という観点から作品全体を捉え返してみたい。

【シンポジウム】

（第一室）

1. 芸術のための芸術／世界のための芸術——開かれた唯美主義の形態

唯美主義運動の「大義」—ウォルター・ハミルトン著『英国の唯美主義運動』（1882 年）をめぐって

日本女子大学 川端 康雄

モリス商会の設立と職工たち

慶應義塾大学 横山 千晶

美の追求と知の探求—ヴィクトリアン・ソロモンになりたかった D・G・ロセッティ

慶應義塾大学・東京外国語大学 加藤 千晶

唯美派建築とヴィクトリア朝期イギリスの時代精神 —建築家たちがめざした実用と美の総合

フェリス女学院大学 近藤 存志

ウォルター・ハミルトンが『英国の唯美主義運動』（1882 年）で、ラファエル前派やその周辺の「唯美派」たちが世相を賑わした様子を記録し、マックス・ビアボウムが『イエロー・ブック』（第 4 号、1895 年）において「『美』は 1880 年よりずっと前に存在していた」と彼らの影響の持続性を強調したとき、「唯美（主義）」は、装飾性、個人の内面への耽溺、有益性の軽視、現実遊離の空想といった、幾分誇張気味のイメージを纏わされていた。産業・経済・科学・思想の急速な発展をみたヴィクトリア朝期に、一途な美の追求により芸術・文学に寄与した彼らは、しかし、外界に背を向けていただけではない。美を追

求しながらも、又、追求するがゆえに、時代思潮に敏感に反応し、共鳴・反発しつつ、芸術家としての存在の在り方を模索し、真理を追究してもいたのである。

本シンポジウムでは、ヴィクトリア朝期の唯美主義的傾向を持った芸術家たちの、社会や時代精神に対する立ち位置に光を当て、彼らが時代の支配的な価値観との相克の中で、いかに外界と対峙し、作品を生み出したかを考察する。彼らにとって、美と社会性／外界への関心は相互に内包しうるものであった可能性を提示し、さまざまな開かれた唯美主義の有り様にみられる「非実用の有用」の逆説の意義を各々の登壇者が問い直すことで、現代にも通ずるヴィクトリア朝の一断面を浮き彫りにしたい。唯美主義は究極的には開かれていた。クラインの壺のように。 (企画立案：加藤千晶)

(第二室)

2. ヴィクトリア朝の書簡——国政から私信まで

ヴィクトリア女王 一大英帝国のゆくえを決めた書簡	関東学院大学	君塚直隆
“To the Editor of the Times” から見るヴィクトリア朝の英国	明治大学	小宮彩加
ブロンテ姉妹のラブレター —恋愛における手紙の功罪	駒澤大学	川崎明子

ヴィクトリア朝に形成された近代的郵便制度は、印刷や製紙技術の向上、国内の鉄道網整備や国外航路における蒸気船導入といった交通革命など、当時の技術革新がもたらした最も身近で顕著な結実の一つであった。ローランド・ヒルが考案した料金前納制度の導入を皮切りとする郵便改革は、書簡のやり取りを簡便で安価にし、広大かつ緻密な通信ネットワークを国内外に建設した。それは植民地統治や自由貿易主義の促進という公的領域に貢献するのみならず、人々の日常においても気軽に私信を送受信するという新しい習慣を作り、手紙というメディアの可能性を拡大し、ひいては文字テキストという文化の性質をも変容させることになる。興味深いことに、個人から個人へという形態をとる書簡は、逆説的に、常に公的な領域に開かれる可能性をはらんでいた。

本シンポジウムでは、まず、君主という最大の公人であるヴィクトリア女王を取り上げ、大臣や植民地総督のみならず海外王室に嫁がせた王女たちへ書き送った大量の書簡が、政策決定にまで影響を与えた過程を考察する。次に、郵便配達されるという点で郵便物でもある新聞という公器において、有名無名の読者が編集者に宛てた「手紙」という形態をとる投書欄を、『タイムズ』紙の例を中心に検討する。最後に、視点を文学に移し、シャーロット・ブロンテが書いたラブレターの可能性と限界を、作品中の例も参照しながら分析するとともに、編集者への新作の原稿の送付がラブレターの発信と相似した点についても論じる。

【特別講演】

司会：甲南大学

中島俊郎

帝都に響きわたる咆哮——近代ヨーロッパの動物園・水族館文化

関西大学 溝井裕一

本講演のテーマは、19～20世紀初頭の動物園・水族館文化である。

世界初の動物園が生まれたのは、18世紀末のフランスにおいてであった。前身となる動物飼育施設はそれ以前から存在していたが、フランス革命を期に、動物園は公衆のための教育・研究施設として定義されることになる。やがて、ロンドン動物園(1828)がイギリスに誕生し、その敷地内に世界初の水族館(1853)が建設される。

動物園・水族館はやがて、ドイツやベルギーなど他の国々にも浸透していったが、その過程で独特の文化が生まれた。たとえば、帝国主義まっさかりの当時、展示する生きものの種類が多いほど、その国の軍事的・外交的・経済的パワーを示すことができたから、各国の動物園・水族館はエキゾチックな動物の入手にあげられていた。

また動物園・水族館は本来、教育・研究を主目的としていたが、大衆の求めに応じて、しだいに異郷の自然・文化を「体験」するための場へと変貌していった。具体的には、動物園ではエジプト神殿やモスク

をモデルにした飼育舎がつけられたり、異民族の展示がおこなわれたりした。水族館においても、海底を模した空間をつくって人びとを「没入」させることが試みられた。これがもっとも先鋭化したのが、ハンブルク近郊につくられたハーゲンベック動物園（1907）である。

本講演では、多数の画像をもちいながら、荒々しいエネルギーに満ち溢れていた当時の動物園・水族館の世界へのご案内したい。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

(The Victorian Studies Society of Japan)

事務局: 〒610-0394 京田辺市多々羅 1-3

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部

玉井史絵研究室内

Tel: 0774-65-7223

E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com